2020年 附属小学校の実習から後輩に伝えたいこと

1. 授業づくりのポイント

- ・授業を考える際に、予想される発言だけでなく机の上の状態などの環境面も考えておくことが大切。
- ・どんな授業をしたいのかを実習が始まる前に考えておくといい。
- ・教師主導で進めるのではなく、授業では子どもの発言を拾い、そこから内容を広げていく
- ・子どもに任せた上で、さりげなくサポートしていくような関わり方をする。
- ・指導案通りに進めようと焦るかもしれないが、子どもたちに考えが共有されるまで待つこと。
- ・板書は子どもの思考を整理するものです。授業が終わった時に黒板を見ると授業の流れがわかり、ポイントが掴めるようにする。
- ・授業内で「正解主義」を用いないようにする。寄り道や試行錯誤の中で子どもが納得して理解できるプロセスを大事にする。
- ・指導案で準備した内容から外れたり想定外の展開になっても、子どもの考えや意見を尊重し、子どもから出た意見を有効に使いながら、子どもの発想の豊かさに触れて授業者自身も楽しんでほしい

2. 子どもから学ぼう

- ・授業にも遊びにも何事も一生懸命な子どもたちから学ぶことは多い
- ・次々と話しかけるのではなく、子どもが落ち着いて話を聞ける環境が整うまで待つことが大切。
- ・(休み時間には)時には誘ってくれる子どもを断って他の子どもと遊ぼうとする勇気も大切。自分から実習生に声をかけにくい子どもと関わる機会も大事。
- ・「これは子どもの成長につながるのか」「子どもの安全は確保できるか」、常に念頭に置く
- ・子どもを観察することで思考の流れなどを予測できるようにすること(指導案づくりにつながる)
→授業中の発言や表情、班の中の発言や話し合いの様子を見る
- ・子ども達の「やってみよう!」「楽しそう!」をひきだせるような活動を考え、またその活動が授業のねらいの本筋からそれたものではないかをよく考えることが大切
- ・ひとりひとりの子どもについて知ることや実際に関わることを通して、「あの子だったら、どんな反応をするかな?」「どんな意見が出るかな?」と予想できるようになる

3. 附属の先生から学んだこと

- ・価値づけをすることで子どもを伸ばすことができる。
⇒単にその時できたことではなく、子どもの変化を価値づける。
- ・子どもの思考の流れに合わせた授業の大切さ
→教科書の流れに子どもを合わせるのではなく、子どもの思考のプロセスに合わせる
- ・子どもに注意する時に感情的になるのではなく、子ども自身が気づくように事実を伝えたり、自分達で解決できるような助言をして気づきを促していた
- ・担任の先生の授業をしっかり参観し、上手いかなかったり多少不自然になっても良いので、実習生として子どもとの関わりや板書などをどんどん真似して自分の授業に取り入れると良い

4. 気をつけたいこと

- ・担任の先生や他の実習生の授業中に子どもの活動に介入する、話しかけることは授業妨害にもなりえるので気を付けること。特別支援学級のTTとは違います。
- ・実習生同士でお互い支え合うこと。授業討議も、改善すべき点を言うことも大切だが、良いところを褒めないと自分のどこがいい分らないので良かった点を伝えるようにする。
- ・夏場で扇風機が動いている時には後まで声が届きにくいので、しっかり声を出さないと伝わらない。
- ・実習生同士で話し合っても分からなかったら、担任の先生に質問して疑問は早めに解決しよう。